

「余暇生活」というテーマで大学に講義科目が置かれた始まりは一九八三年にスタートした放送大学だと思ふ。最初の科目の中に「余暇生活」が置かれたのは社会福祉論の泰斗・一番ヶ瀬康子日本女子大教授の提案によるものであった。筆者も一番ヶ瀬先生のお手伝いをして教科書と教材ビデオ作りに参加した。NHKの資料センター(当時)でいろいろ映像資料を探して「ビデオ余暇生活」全一〇巻を作ったのは楽しい仕事だった。今でもこのビデオを重宝している。時々学生に見せているが、映像の中の小生があまりに若い(三〇年近く前なのだから当然だ)ので学生がゲラゲラ笑うので困る。実は放送大学は数年でこの科目を止めてしまったので、教科書に手を入れて有斐閣から改めて刊行した。この『余暇生活論』はロングセラーで、今でも需要があるようだ。

緊急報告!
余暇力検定始末記
「余暇生活論」を
どう教えるか
藪田碩哉

では赴任以来ずうっと余暇生活論をやってきた(現在は学科必修科目)。そのほかにもいくつかの大学でこの科目を置いてもらってきたが、現在は立教大コミュニティ福祉学部の授業が学生が一人もいない賑わっている。

業には出ずに単位だけ要求する奴もいて始末に悪い。業を煮やして「君たちは余暇を甘く見ている、余暇はそんな生易しいものではない!」と宣言し「余暇力検定」なる特別テストを実施した。これに及第点が取れるなら単位は保障しようという触れ込みである。

「余暇力検定」は常識テストと創造テストの二つからなる。前者は余暇について当然知っておくべき知識で、ILO第一号条約の批准の有無、有給休暇の消化率、ワークシェアリングの意味、レジャー憲章の内容、レジャー市場の規模、デューマズデイエの余暇の三機能など、余暇問題を考える上でポイントとなることを一〇題、後者は余暇にかかわるセンスを問うもので、「あなたに突如一週間の休暇が与えられました。ただし、いま住んでいる住まいから半径一キロ以内にいるという条件です。どんな風

に過ごしますか」とか、「身動きのとれない満員電車の中でもできる気晴らしの方法を一つ教えてください」とかいふ頓智問題である。「ふ・く・し」の三文字を五七五の頭に置く折句を作るというのも入れた。

常識問題はいきなり聞いたわけではない。いずれも授業時間に丁寧に解説したはずのことであり、使っている教科書(拙著『余暇の論理』叢文社)



新入会員紹介
色摩正雄
愛知みずほ大学

に入れさせるのが狙いである。後者は知識で書くのではないから、みんなそれなりに面白がって書いていて、読んで愉快なものも多々あった。ただし、こちらは採点が難しい。先生が面白い!と思えばいい点数と宣言して採点した。学生の感想で「考えることが楽しかった」「想像力が刺激された」というのもあり、これ自体が良質の余暇活動になったようである。

(余暇力検定に興味をお持ちの向きには資料を送ります。s.sonoda@nifty.comにて連絡を)

にもちゃんとして書いてある。にもかかわらず呆れるほどできない。授業をロクに聞いていないことが如実にわかる結果となった(講師の話が学生に届いていないことの証拠でもあるが)。もちろん高得点を期待したわけではなく、正解を解説して余暇問題の要諦をもう一度頭

日本余暇学会ニュース

発行所 日本余暇学会 発行人 藪田碩哉 発行日 平成二十三年一月三十一日

第73号

日本余暇学会事務局
〒191-0016 日野市神明1-13-1
実践女子短期大学
生活福祉学科藪田研究室
Tel/FAX 042-584-5428
e-mail info@yokagakkai.jp
Home Page http://www.yokagakkai.jp/
編集人: 山田貴史

第一回「レジャー・スタディーズ」研究会「研究」がスタートしました。このプロジェクトは、隣接分野の専門家をお招きして、隔月のペースで開催する連続研究会のシリーズ企画です。その趣旨は、これまで日野に置かれてきた日本の余暇学(レジャー・スタディーズ)の場を、人通りの多いにぎやかな都市の一角へと移すことによつて、むしろ幅広い知の交差点に結節点とし

ての豊かな意味を担ってほしいという、先行プロジェクトのねらいの延長線上に位置づけるものです。例えば、グローバル化する現代資本主義の局面において、一方では「カルチュラル・エン」のようにメディア・観光・スポーツ・アートをはじめ広く消費文化やポピュラーカルチャーの重要性が指摘され、他方では②労働の二極化や格差社会の現実が示すように、「労働と生活」をめぐる捉

え直しの必要性が叫ばれ、すでに多くの問題提起がなされてきました。実際私たちの日常生活になじみ深い問題として、まさしく「余暇・レジャー」と関連の深い重要なテーマであるにもかかわらず、これまで分野の知見とはほとんど関係わりなく議論がなされてきたのです。そこで今回のプロジェクトは、次のように構想されています。第一に、

越境するレジャー・スタディーズへ
幅広い知の交差点
= 結節点に向けて

隣接分野の専門家の方々に、フロンティアの研究動向についてご教示をたまわると、知見を共有していくという点です。第二に、会員による問題提起をはじめ、研究会での触発的なディスカッションをとおして、余暇学(レジャー・スタディーズ)と接点や結節点に

る当分野の研究蓄積と並行してなされるものです。第三に、このように隣接分野の専門家をお招きするこの空間では、議論の幅が広がる研究分野に、相互交流や見解の交換をはじめ、何よりも余暇学(レジャー・スタディーズ)の地平を各分野のフロンティアの議論と対話に答可能な水準へと開いていく、という点です。そしてこのような開放的イベントをとおして、既存の会員だけでなく、周辺の野の多くの研究

者に足を運んでもいい、余暇学(レジャー・スタディーズ)がさまざまな次元で直接・間接に活性化されていくことが、その先のイメージとして開かれてくるでしょう。あたかも交響するコーラスのように、重奏するセッションのようには、特定の誰かではなく、未来のより多くの人々が主役となるような、そのような形で余暇学(レジャー・スタディーズ)の知見が、つぎつぎと更新され豊饒化されていくことを願っています。(小澤考人)

「レジャー・スタディーズ2011研究会」
STARTUP STARTUP

「レジャー・スタディーズ2011研究会」

「レジャー・スタディーズ2011研究会」

「レジャー・スタディーズ2011研究会」

「レジャー・スタディーズ2011研究会」報告のために発行が遅れました。また「平成二十二年余暇ニュースダイジェスト」は次号に掲載する予定です。

「韓国マリン・レジャー学会6月に立ちあげ 日韓共同シンポジウムへのお誘い」 宮入恭平

昨年9月に、韓国のチュンチョンで第11回世界レジャー大会が開催されました。スポーツ・イベントやレジャー関連の展示などがおこなわれるなか、アカデミズムが中心となった世界レジャー会議も併せて開催されました。日本余暇学会からは菌田会長と宮入が、韓国レジャー学会の企画した共同シンポジウムに参加しました。日韓両国は近年、ポピュラー文化を中心とした交流が活発になっています。しかし、時差もなく身近な隣国でありながらも、実際には表面的な部分での相互理解にとどまっていたことを痛感しました。とくにレジャー研究では、両国ともアジアという枠組みのなかで、同じような立ち位置にあることを再認識しました。つまり、欧米のレジャー概念を十分に理解しないままに、独自の「余暇学」が閉鎖的に語られてきたというわけです。好むと好まざるとにかかわらず、グローバル化が進む現在の社会で、レジャーはドメスティックな視点ばかりでは対処しきれない状況にあります。

世界レジャー大会で共同シンポジウムを企画したaSSIST (Seoul School of Integrated Science & Technologies) のチェ・ソクホ教授は、マリン・レジャー学会を立ち上げました。昨年12月にリサーチのために来日したチェ教授と会った際に、今年6月9日(木)、10日(金)に韓国のソウルで開催予定のマリン・レジャー学会カンファレンスで、日韓共同シンポジウムをおこなうことを申し合わせました。現在、チェ教授とコンタクトを取りながら、具体的な内容を詰めています。共同シンポジウムでは、マリン・レジャーという枠組みに特化することなく、日本と韓国のレジャー全般についてのディスカッションを予定しています。また、会員の方々の英語による個人発表も盛り込む予定です。

当学会では1月から、余暇研究を見直す試みとして、継続的な「レジャー・スタディーズ2011研究会」をはじめました。学会という組織に属する動機付けは、個々によってさまざまだと思います。その中には余暇研究をできるだけ広い視野で進めたいと希望する会員も少なくないでしょう。そこで研究会と同様に、海外の学会や研究者との交流が、今後の余暇研究を活発にさせるために重要になってきます。もちろん、組織が機能するためには、個々の自発的で積極的な参加が求められます。6月の共同シンポジウムに、ひとりでも多くの会員が参加することを願っています。



会費納入のお願い

口座番号: 00140-9-729065
加入者名: 日本余暇学会
会費: 一般会員10,000円
学生会員5,000円

*余暇に関心のある方に入会をお勧めください。

学会活動は、皆様の会費によって支えられています。会費未納の方(過去3年間)には、振り込み書を同封しています。入金よろしくお願い致します

第一回 レジャー・スタディーズ2011研究会 参加報告

山田貴史

一面記事のように一月十八日火曜日、桜美林大学四谷校舎で、「余暇学再編プロジェクト」を引き継ぐ「第一回レジャー・スタディーズ2011研究会」がおこなわれた。記念すべき第一回のゲストスピーカーは渡辺潤・東京経済大学コミュニケーション学部教授。渡辺先生は「アイデンティティの音楽」(世界思想社)、「メディアの欲望」(新曜社)、「ポピュラー文化論を学ぶ人のために」(世界思想社)などの著書で知られるとおり、ポピュラーカルチャーを長く研究



ゲストスピーカー・渡辺潤先生

な経過から、なぜ渡辺先生は「余暇研究」をされてきた。日本余暇学会にも先生の影響を大きく受けて、親交のある会員も多い。だが渡辺先生は余暇学会会員ではなく、「余暇研究」という言葉は使わず、どちらかといえば「レジャー研究」の立場をとられてきた。そのような

渡辺先生は、現在、ご自身が河口湖周辺で「森の生活」を過ごされていることから「生活」の中に「暇」と「暇で無いもの」を種分けすることは難しく、混沌とした生活の中に「レジャー」や「やるべき」と「やらなければならない」など分けて考える発想がご自身にならなことを説かれた。さらに「暇」は「余っている」ものという認識がないことも説かれた。その裏付けとして、どのような経過を経て「レジャー」や「余暇」という概念が生まれたのか、

「ライフスタイル」や「余暇」という概念は、近年の議論など、様々なレジャー概念への再検討を提案された。今回の議論は、近代社会の誕生とともにどのような余暇観、レジャー観がはびこり、それが臨界点に達したのかを浮き彫りにした。最近流行の「正義論」にも相当する、壮大で巨視的な議論だった。その中で「対抗文化」として生み出されてきた「ヒッピー」「ライフスタイル」「スローフード」などが記号化され、本来の意味や精神から離れ、消費の対象となっていく「副作用」も明らかにされた。

そのような「対抗文化」としての余暇が、巨大な「権力」に絡め取られないためにはどうすればよいのだろうか。その間に渡辺先生は「authenticity」という概念を呈された。その言葉は自らの余暇を、自分よりも大きな世界にたって考えることだ。自分が余暇を過ごし、レジャーを楽しんでいる(現在)を考へることによって、ナリスティック、閉鎖的な余暇に、なりたくないことが示された。そしてそれは現代資本主義批判の領域にまで高められていった。

その手法により、我々が余暇学会を運営していく意味、存在を知らしめていく意義がそこに見いだされるように感じた。渡辺先生が語られたような「融合した」生活を再興するには余暇学会の力が不可欠だ。私は渡辺先生の議論によって、最後に「人」がどのような「死に様」をするかが、余暇やライフスタイルを選びかたにかかっているという気がしてならなくなつた。たとえば今日問題となる「無縁社会」「孤独死」などの問題は、余暇学研究と「無縁」でないという解した。さらに私にとつての大きな成果は、様々な社会問題を余暇、レジャーの問題として解きほぐしていくことが、余暇学の(現在)を創るのではないかと感じた。前近代社会(近代社会)が生み出した宿痾が噴出して、臨界点を通過した、ポストモダンの(後近代)余暇観を生み出すヒントを今日の研究会から得ることができた。